
OUTPUT [ファイル名] ;

機能:

OUTPUT は、その後の全てのアウトプットをターミナル以外の特定の外部ファイルへ送ります。

使用法:

OUTPUT を使って全ターミナル・セッションの結果を保存したり、(時系列グラフ, 散布図, 回帰分析の結果を) 後でプリントしたり、詳しくみるために部分的に選択することが出来ます。このコマンドは、TERMINAL コマンドでアウトプットをターミナルに戻すまでずっと有効です。結果を、スクリーンとアウトプット・ファイルに同時に送ることはできませんが、警告とエラー・メッセージは起こると同時に両方に表示されます。

OUTPUT の引数は1つのファイル名だけで、この引数は TSP 変数名の制約にあっていることが必要です。すなわち、8文字に限られ、ファイル名拡張子はあってはいけません。ファイル名をコマンド行に書くと、拡張子 .OUT が仮定され、ファイル名がないとその入力が進められます。- この場合拡張子やディスク・ユニットと同様に、他のディレクトリを指定することが出来ますが、唯一の制約は全部で 32 文字以下という点です。この場合も、拡張子がないときは .OUT が仮定されます。

アウトプットファイルと TERMINAL の間や、いくつかのアウトプット・ファイルの間をいつでも切り替えたりすることが出来ます。ファイルを OUTPUT コマンドで開くとき、そのファイルが既に存在しているときは、その後のアウトプットは新しくファイルを開かないで、その後に追加されます。

ディスクファイルに送ったアウトプットは、SYSTEM コマンド (SYSTEM 参照) で見る事が出来ます。この機能によってシステムコマンドを使うことが出来るようになりますから、EDIT によってファイルの中を見たり、好みのエディタを呼び出して表示することが出来ます。

CONTINUE とタイプすると対話型 TSP セッションにすぐに戻ります。

(注:) 現在開いているアウトプット・ファイルの内容を見たい場合には、SYSTEM コマンドの前にクローズする必要があります - そうしないとアウトプットがファイルからなくなっているように見えます。TERMINAL コマンド、あるいは新しい OUTPUT ファイルをオープンすると現在のファイルはクローズします; SYSTEM から戻って元のファイルを再びオープンすると、アウトプットは続けて以前のものに追加されます。

PCを使っている場合は、TSP がロードされるとプログラムが大きいためエディタの入る領域がなくなる場合があることに注意して下さい。この場合、アウトプットファイルを見るためには、TSP を一旦終えなくてはなりません。

例:

```
13? Sending regression output to a file
14? OLSQ Y C X Z ;
15? OUTPUT YXZ;
16? EXEC 14
17? TERM
```

結果を保存してあるアウトプット・ファイルに加えて、終了前に今のセッションを文書化することができます:

```
74? OUTPUT AUG2385
75? ?
75? ? Interactive TSP session on Aug 23, 1985 – RSS
75? ?
75? ? comments about results, files used, etc....
75? ?
75? REVIEW    ? photo of session
76? ?
76? ? display of symbols created during session sorted
76? ? into classes
76? ?
76? SHOW SERIES, EQUATION, MATRIX, PROC
77? EXIT
```

これらのコマンドとコメントは結果のアウトプットと同様にディスクファイルに書きこまれます。特定の範囲を REVIEW したり、重要な結果を EXEC することによって、意味のある所だけを文書化するために選択することができます。コメント区切り記号『?』は、アウトプットファイルをもっと見やすくするために自由に使うことができます。もちろん、TSP は文書化されていないセッションの記録として BKUP.TSP というファイルを自動的に作成します。